様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１１７６

研究課題名（和文）修士レベルにおける創作表現のための音楽科教員養成プログラムの日米共同開発と評価

研究課題名（英文）Japan-U.S. Joint Development and Evaluation of Creative Music Making Training Program for Master's Level

研究代表者
時得　紀子（Noriko, Tokie）

上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・教授

研究者番号：３０２４２４６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：日米の初等・中等教育の教員養成課程音楽専攻に学ぶ修士学生が携わる、音楽科授業実践へのフィールド調査などを実施した。その結果、修士学生が言語活動、身体表現活動を導入した創作表現の指導法に習熟することは、汎用的な表現力を子どもに培う上で有効であることが明らかとなった。
また、米国修士・博士課程の現行カリキュラムへの分析と大学院授業への参観を実施した。これらの結果から、我が国の音楽専攻の修士学生にとって、演劇・ダンスなど他の芸術領域への習熟が可能となる、幅広い授業プログラムの導入や、国際レベルでの単位互換制度の充実に向けた大幅な改革が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We implemented a field research of U.S. and Japan. As a result, master’s students majoring in music and enrolling in elementary and junior high school teacher training courses in Japan should be familiar with teaching methods involving creative expression. This kind of familiarity is also effective in cultivating 21st-century skills in children; teaching practice and analysis results from both Japan and the United States have made this clear.

Considerations of the master’s curriculum and observed classes in the United States would indicate that Japan needs to follow the United States’ example of a broader class program, involving master’s students getting opportunities to study other artistic areas such as dance and drama. It is also strongly suggested that Japan should accept credits from overseas.

研究分野：音楽教育

キーワード：修士レベル　創作表現

１．研究開始当初の背景

(1) 平成 24 年度中央教育審議会答申では，教員の資質能力を向上させるため，教員養成の修士レベル化を打ち出し，教科等の実践的な指導法の見直し，グローバル化対応などを掲げた。この動向を受け，音楽科の実践的な指導法の見直し，修士レベルにおける今日的課題に対応した指導力の育成はさらにクローズアップされ，喫緊の課題となった。

また，国際レベルでは，21 世紀型学力が世界各国で模索され始め，汎用的なスキル習得への要請が高まった。

(2)　前研究となる，科学研究費補助金 基盤研究(C)2007～2009 年度では総合表現型音楽学習のカリキュラム開発[1]，続く同基盤研究(C)2013～2012 年度では，音楽づくり(小学校)，創作(中学校)の領域に着目し，研究対象として米国での創作表現活動の先進的な実践事例を検証した。それらの成果を踏まえ，我が国では修士レベルでの指導法が未だに確立されていない現状からも，高度な実践的指導力の育成をめざした創作表現領域のプログラム開発に取組むこととした。

２．研究の目的

(1) 修士学生（院生）が，今日の音楽教育に求められる指導力を培うことに資する創作表現の授業プログラムを米国と共同で開発する。

先述した我が国の音楽科の背景を踏まえ，創作表現の活動領域に焦点をあて，我が国のプログラム構築への有効な手立てとすべく，主に米国の優れた実践事例から示唆を得る。

(2) 本研究を推進する過程で，新たに重要な課題が浮かび上がった。創作表現の活動そのものの単独のプログラム開発に加え，米国カリキュラムに開講されている周辺諸科目との有機的関連性についての考察が不可欠ではないかと捉えたのである。

子どもの即興的な活動を喚起し，創造的な活動の幅を拡げる指導力育成のために，併設科目が大きくかかわるものと考えた。そこで，修士学生が取得する関連諸科目と創作表現プログラムとの相互の関連性や期待される効果などの観点からも新たに考察を加えることとした。

３．研究の方法

(1) 日米大学院修士レベルに開講される，創作表現に関わる授業への観察，及びこれらを受講する修士学生による，小・中学校での授業実践への観察を行う。

授業の活動場面（記録した映像資料を含む）へのパフォーマンス評価，指導に携わった修士学生，及び児童・生徒による授業後の振返り記述への質的分析を加える。両国の実践から優れた授業モデルを抽出し，授業プログラムを構築する。

調査対象は，日米ともに前研究で実施した大学及び小・中学校を中心として引き続き検証する[2]。

(2) 主として米国の修士課程（一部，博士課程）の現行の教員養成カリキュラムとその授業実践を分析し，我が国における新たな修士プログラム開発への示唆を得る。

特に，米国の開講科目に焦点をあて，創作表現共に併設されている授業科目，並行した取得が奨励されるプログラム，それらの授業科目の関連性などを比較し明らかにする。

４．研究成果

(1) 日米の創作表現の違い（オルフ，ダルクローズの活用の有無）

①米国に比べ，我が国の教員養成系大学の修士レベルの授業プログラムでは，オルフ，ダルクローズ等の音楽教育メソードを導入した実践的な授業展開がなされておらず，一方の米国の修士カリキュラムでは，活動の随所に，これら欧州のメソードを活用していた。

ここに両国の修士レベル，小・中学校での授業実践のアプローチの大きな相違点が見出され，プログラム構築の参考とした。

米国ニューヨーク州，コネチカット州，マサチューセッツ州，ミシガン州の各大学院修士課程の授業観察からは，以下の実践を基本とした指導法の授業が展開されていた。

- オルフ楽器を用いた協働による即興演奏，オルフ・シュールヴェルクの理念に基づく音楽と言葉を生かした創作。
- ダルクローズのリトミックを取り入れた，リトミックの理念に基づく身体表現を取り入れた即興的な創作。

また，これらを受講する修士学生への観察から，全身の感覚を駆使して音に耳を傾け，身体表現に集中する場面，グループや個人で即興的にオルフ楽器を用いて合奏する場面など，即興的な表現が展開されていた。

②米国の修士学生による小・中学校での授業実践への観察，子どもの活動へのパフォーマンス評価，授業後の記述調査への分析から，創作過程で，課題解決力，仲間とのコミュニケーション，音・音楽の構成や表現の創造，探求，発想する力など，思考，判断，表現など多岐の項目に関わる学びの様相が観察された。

また，授業後の振返り記述では，10 項目の学びの評価観点[3]において，いずれも 5 段階

中，5 に近い高いレベルの肯定的な自己評価が見られた。

これらの結果から，修士学生が言語活動，身体表現活動を導入した創作表現の指導法に習熟することは，汎用的な表現力を子どもに培う上で有効であることが確認された。

③ ①でも述べたように，米国や豪州の修士プログラムでは，オルフ・シュールヴェルクの理念に基づく音楽と言葉を生かした実践，ダルクローズ・リトミックの理念に基づく音楽と身体表現を関わらせた学習場面などを効果的に取り入れ，諸活動への橋渡しの役割も果たしていることが観察された。これらの２つのメソードは，音楽と言語，音楽と身体表現，すなわち，身体表現（ダンス）や言葉（演劇）に学びを拡げる音楽科の授業モデル（図１．参照）として捉えられることから，本研究のプログラム構築に組み込んだ。

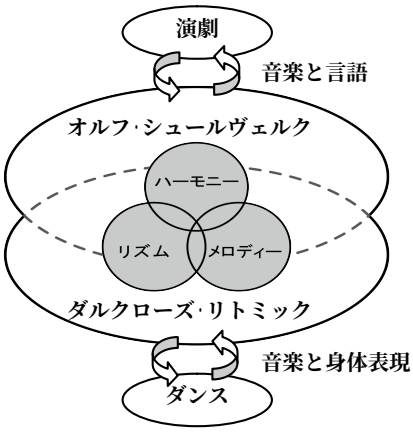

図１．身体表現（ダンス）や言葉（演劇）に学びを拡げる音楽科の授業モデル（時得 2016）

(2)米国修士・博士課程の開設科目

本研究で構築した創作表現プログラムは，米国の授業プログラムを参考とした中でも，次の科目を最も参考として構築した。

・「音楽性をはぐくむ力 ―創造性の獲得への戦略 その 1＆その２」(Musical Skills - Creative Strategy Level I & II)

①米国修士カリキュラムでは，音楽教育における専門性を有する教員育成のために，領域を超えた横断的な単位習得が恒常的であり，音楽教育専攻の修士・博士の学生に対して，専門としない舞踊教育や美術教育に関わる単位を複合的に習得することが奨励されていることが明らかとなった。

その例として，芸術の領域を超えた横断的な科目の例よして，以下のように類型化された科目が開設されている。（なお，科目名の邦訳及び，科目の類型化は筆者による。）

領域を超えた芸術教育の科目群

・「ダンス専攻ではない学生に向けたモダンダンスの実践的体験授業」
(Modern Dance for Non-Dance Majors)

・「現代美術論」
(Contemporary Arts)

・「教育における音楽劇概論」
(Music Theater in Education)

先駆的な課題に対応した科目群

・「コンピューターを活用した音楽教育」
(Microcomputer in Music Education),

・「ポピュラー・若者の音楽のカリキュラムへの導入」
(Popular and Youth Music in Curriculum)

課題探求・解決型の教育，思考技術養成のための科目群

・「音楽教育における創造性と問題解決」
(Creativity and problem solving in Music Education)

・「ジャズの即興演奏への導入 レベル I＆II」
(Jazz Improvisation Introduction, Level I & II)

これらを並行して受講する米国修士学生への意識調査からは，主として次に集約される回答が得られた。

・複合的な授業を受けることで異なる芸術領域から，表現の解釈などへの発想を得ていると実感する。

・課題解決力，思考法についての講義と並行した履修によって，指導法のアイディアを得ることに役立っている。

以上の米国修士カリキュラムへの考察から，我が国は米国に倣い，音楽専攻の修士学生が演劇，ダンスなど，他の芸術領域への習熟や，課題解決・思考法に関わる科目履修も併せて可能となるよう，幅広い授業プログラムの導入と開設が示唆された。

②本研究の一環で，全米・全豪の両音楽教育学会に参加し，両国の最新の音楽教育情報を得た。

米(アトランタ大会)・豪(アデレード大会)の各全国大会では，いずれもテクノロジーを生かした音楽学習の研究が急速に進められていた。こうした先駆的かつ今日的な課題に対応した代表的な科目が下記を例として，各大学院に設置されている。

・「音楽教育とコンピューター活用法」
(Microcomputer in Music Education),

・「ポピュラー音楽のカリキュラムへの導入」
(Popular and Youth Music in Curriculum)

この他，冒頭でも研究の背景に掲げた，グローバル化対応を現実のものとするためにも，国を越えて大学院間での単位互換制度の必要性が示唆された。例として，本研究で，現行のカリキュラムの多くを参考とした，米国コロンビア大学教育大学院では，博士全 90 単位の半数にもなる，45 単位を米国以外の海外からの単位であっても認定している。

この点においても，国際レベルでの認定を視野にした，我が国の修士カリキュラムへの早急な改善が課題とされた。

(3) 総括と今後の課題

本研究を通じて，互いに有機的に関連が図られた，米国大学院に見られる理論と実践の両面からの幅広い芸術カリキュラム構成の在り方が示唆された。

また，本研究で構築した，創作表現のためのプログラムの有効性は．(1)に先述したように汎用的な表現力を子どもに培う上で総じて有効であることが明らかとなった。

本研究での創作表現のプログラム構築により，創作表現の活動面での枠組みを提示できた。

しかしながら，「課題解決学習」や「批判的な思考を深める」ための諸科目の併設の構築は本研究期間内ではかなわず，今後の課題とされた。また，これら諸科目の相関関係についても，今後の研究にゆだねられる。

創作表現を実践する教員の思考・発想を支える上で，同等に重要であると考えられる，これら周辺科目との関連については，引き続き考察をしていく。

(4) 成果発表

3 年間の研究の発信として，2013 年 7 月開催の国際音楽教育学会 ISME (International Society for Music Education)アジア・ 環太平洋地域大会 (APSMER)シンガポール大会及び，2015 年 7 月，同香港大会，並びに 2014 年開催のブラジル世界大会でいずれも査読を経て,大会誌へのフ ル・ペーパー掲載論文に採択された。

併せて，これら 4 つの国際学会での口頭発表にも採択され，各国研究者との研究交流・情報交換の貴重な機会を得た。さらに，本研究成果を踏まえた投稿論文が 2016 年 7 月，スコットランド・グラスゴー大会フル･ペーパーへの掲載，及び口頭発表の採択を得た。

以上のように本研究期間の全ての年度で毎年，国際学会成果発信により，国際的なレベルでの情報発信に貢献した。

国内では 2013 年, 2014 年, 2015 年の 日本音楽教育学会 弘前大会，東京大会，宮崎大会で継続した学会発表を行った。この他，鳴門教育大学から出版された日中 教師教育国際学会誌（英文フル・ペーパー)， 上越教育大学研究紀要に 3 年間連続して，論文が掲載された。

音楽教育以外では，日本カリキュラム学会上越大会で，現職の中学校音楽教諭と共に，成果を発表した。

註・及び参考文献

１）「総合表活動の理論と実践」，時得紀子（編)，無籐隆，村川雅弘，田中博之，小林田鶴子他，教育芸術社，2009，全 104

２）米国 :ニューヨーク州, コネチカット州, マサチューセッツ州，ミシガン州の 4 大学，各地元の小学校 4 校・中学校 4 校 日本：附属学校を有する 2 大学，同附属小学校 2 校・同附属中学校 2 校

３）評価観点・項目は，無籐・時得の共同制作による，表現活動 10 項目の評価観点 (2007)に改善を加え，芸術表現に関する 5 項目（音楽，美術，演劇，舞踊，メディア・アート）に， さらに参加度を計測する 5 項目（参加, 身体, 言語, 協働, 省察）を加えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① Tokie, N.， Cultivation of Twenty-First-Century Skills Through Integrated Studies : Lessons from Case Studies in Japanese Schools， ISME (International Society for Music Education)2016 World Conference : Glasgow， Scotland : Full Paper Proceedings of the 32th World Conference， 査読有，2016， 印刷中

② 時得 紀子，金子謙太郎，飯村諭吉，初等教育における身体表現活動をめぐる一考察―上越及び兵庫教育大学附属小学校の実践から―，上越教育大学研究紀要，査読有，第 35 巻，2016，pp.3-9

③ 時得 紀子，飯村 諭吉，アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽指導をめぐる一考察 ― 初等教員養成における実践事例をもとに ―，The Proceedings of the Fourth Japan-China Teacher Education Conference，2015 Naruto University of Education. Printed in Japan，査読有，2015，pp.3-9

④ Tokie, N. , Music Activities which Cultivate Various 21st-Century Skills －Based on a Study of an Elementary School in Japan－ISME Asia－Pacific Regional Conference 2015: Hong Kong, China : Full Paper Proceedings of the 10th APSMER (Asia－Pacific Symposium on Music Education Research)査読有, 2015, Chapter 31, pp.1-7
邦訳:２１世紀型スキルを培う音楽活動－日本の小学校における実践をもとに－

⑤ 時得 紀子, 湯澤卓, 初等教育における総合表現活動をめぐる一考察 ―上越教育大学附属小学校「音楽集会」の実践から―, 上越教育大学研究紀要, 査読有, 第34巻, 2015, pp.283-295

⑥ 小島 千か, 旋律聴取を促す教材選択の視点 ―造形表現を関連させた活動を通して―, 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 査読有, 第20巻, 2015, pp.115-126

⑦ Tokie, N., The Various Abilities Cultivated by Integrated Music Activities: Their Connection to Other Subjects in Elementary and Junior High Schools, ISME (International Society for Music Education)2014 World Conference : Porto Alegre, Brazil : Full Paper Proceedings of the 31th World Conference, 査読有, 2014, pp.349-355
邦訳：音楽と他領域との関連学習のよって培われる多様な力－小・中学校における他教科とのかわわりからー

⑧ 時得 紀子, 西園 友美, 中村 浩, 音楽表現を取り入れた外国語活動をめぐる一考察 : 中等教育における実践事例をもとに, 上越教育大学研究紀要査読有, 第33巻, 2014, pp.283-293

⑨ 時得 紀子, 初等教員養成における音楽指導についての一考察 ―創造力と課題解決力を培う音楽づくりを中心に―, The Proceedings of the Fifth Japan-China Teacher Education Conference, 2015 Naruto University of Education Conference, Printed in Japan, 査読有, 2014, pp.292-312

⑩ 小島 千か, 音楽鑑賞授業における音楽の要素や構造を把握させる指導に関する調査, 山梨大学教育人間科学部紀要, 2014, 査読有, 第15巻, 2014, pp.317-328

⑪ Tokie, N., Russell-Bowie, D., Marjanen, K., Comparison of Integrated Study Situation in Japan, Australia and Finland, Bull. Joetsu Univ. Educ., 査読有, Vol. 32, 2013, pp.409-418
邦訳：日, 豪, フィンランドにおける総合的学習の国際比較研究（音楽教育を核として）

⑫ Tokie, N. Effectiveness of Collaborative Learning in the Japanese Classroom：Integrated Study of Music with Other Arts, ISME Asia-Pacific Regional Conference 2013 Singapore: Full Paper Proceedings of the 9th APSMER (Asia-Pacific Symposium on Music Education Research) Music Contents No.43, 査読有, 2013, pp.2-12
邦訳：日本の音楽科授業における協働学習の有効性：音楽と諸芸術領域を関連させた実践から

〔学会発表〕（計９件）

① Tokie, N., Cultivation of Twenty-First-Century Skills Through Integrated Studies : Lessons from Case Studies in Japanese Schools, ISME (International Society for Music Education)2016 World Conference : Glasgow, Scotland : 2016.7.24-7.29
国際音楽教育学会 グラスゴー 世界大会

② 時得 紀子, 飯村諭吉, アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽指導をめぐる一考察 ―初等教員養成における実践事例をもとに―, 第６回日中教師教育学術研究集会, 2015, 11.8, 於：鳴門教育大学

③ 時得 紀子, 金子謙太郎, 総合表現活動によって培われる多様な力(４)―初等教育における「ダンス」「仲間とのかかわり」を視点として― 日本音楽教育学会 第46回宮崎大会, 2015.10.4, 於：シーガイヤ・コンベンションセンター

④ Tokie, N. , Music Activities which Cultivate Various 21st-Century Skills －Based on a Study of an Elementary School in Japan－ISME Asia－Pacific Regional Conference 2015: Hong Kong, China : The 10th APSMER (Asia－Pacific Symposium on Music Education Research) 2015.7.10-7.13
国際音楽教育学会 香港 アジア地区大会

於：香港教育学院

⑤ 時得 紀子，遠藤好子，湯澤卓，総合表現活動によって培われる多様な力（３）－初等・中等教育における舞台制作の視点から－，日本音楽教育学会 第 45 回東京大会，2014.10.26，於：聖心女子大学

⑥ Tokie, N., The Various Abilities Cultivated by Integrated Music Activities: Their Connection to Other Subjects in Elementary and Junior High Schools, ISME (International Society for Music Education)2014 World Conference : Porto Alegre, Brazil : The 31th World Conference, 2014.7.22-7.25
国際音楽教育学会 ブラジル 世界大会

⑦ 時得 紀子，遠藤好子，中等教育における総合表現型カリキュラムの実践 ―生徒に培われる多様な力に着目して―，日本カリキュラム学会 第 24 回上越大会，2013.7.7，於：上越教育大学

⑧ 時得 紀子，遠藤好子，総合表現活動によって培われる多様な力（２） ―「人間」「社会」への洞察力を育む視点から―，日本音楽教育学会 第 45 回弘前大会，2013.10.13，於：弘前大学

⑨ Tokie, N., Effectiveness of Collaborative Learning in the Japanese Classroom：Integrated Study of Music with Other Arts, ISME Asia-Pacific Regional Conference 2013 Singapore: The 9th APSMER (Asia-Pacific Symposium on Music Education Research), 2013.7.17-7.19
国際音楽教育学会 シンガポール アジア地区大会

〔図書〕（計 2 件）

① 時得 紀子 他，音楽之友社，総合的な学習の時間と音楽科 学習活動例「ミュージカル制作に取組む活動事例から」最新 中等科音楽教育法 中学校・高等学校教員養成課程用(第 6 版)，2015，全 232 (pp.132-133)

② 時得 紀子 他，(株) 第一印刷，Musicking Musically 教科内容構成「音楽」，2014，全 141（pp.121-133）

６．研究組織

(1) 研究代表者
時得 紀子（TOKIE, Noriko）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：30242465

(2) 研究分担者
小島 千か （KOJIMA, Chika）
山梨大学・総合研究部・准教授
研究者番号：80345694

(3) 連携研究者
無籐 隆 (Takashi, Muto)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：40111562